

## 天台止観における氣息治病法について

山口弘江（駒澤大学）

天台智顛（538-597）が確立した実践論は、講説をもとに弟子の章安灌頂（561-632）が編集した『摩訶止観』において体系化される。この中では病についても分類・詳説していることから、仏道修行においては病の克服が重要な課題であったことが知られる。本発表では、智顛の実践法を端的にまとめたものとして知られる『天台智者大師禪門口訣』（以下『禪門口訣』）一卷（T46）に説かれる氣息、つまりは呼吸による各種治療法に着目し、その実践法の背景を考察する。

『禪門口訣』は一般的な知名度は決して高くないが、智顛の文献を網羅的に研究した佐藤哲英は「仏教医学に関する文献として興味深い資料」と評している。明代を代表する名僧の一人、雲棲株宏（1535-1615）は内容が粗雑だとして智顛のものではないと批判するが、佐藤はその成立を『次第禪門』より後、『摩訶止観』より前として智顛の説であることを疑わない。本発表において『禪門口訣』の成立は佐藤説に基づき理解することとした。

さて『禪門口訣』では、禪病の原因として「身作病」「鬼作病」「魔作病」「不調息成病」「業障病」の五つを挙げる。こうした分類は智顛関係の文献を比較すると若干の異同が見られるが、講説の重点をいずれに置くかによって臨機応変にその区分を改めていたとの指摘がある。このうち「不調息成病」には、呼吸が調わないために生じる病を挙げるように、呼吸が病の原因ともなり治療法にもなるという。修行者の日々の営みにおいて、呼吸はきわめて重要なものに位置づけられていることがわかる。

また、随所に治病のための呼吸法が説かれるところも『禪門口訣』が注目される理由の一つである。その呼吸法については、インド仏教の伝統に基づいた禪定修行によるだけでなく、中国医学、とくに道教な神仙術的实践法とも密接な関係にあることも注意されよう。さらに、智顛の自説だけでなく他師の説の引用も多いため、中国において様々な実践法が知られていたことがわかる。たとえば、中国浄土教の祖、曇鸞（476?-542?）に「調気論」という文献があったという。

上述のとおり智顛の時代までに実践法とともに治病法が説かれるようになったのは、禪観の詳細を伝える経論が数多くもたらされ研鑽されたこと、それにより玄高（402-444）や僧稠（480-560）などの禪定に長けた中国僧が多くの弟子を指導するようになり、在家者も含め習禅者が増えた結果、禪病を患う者も増えたからでもあろう。こうした背景の中で、中国において神仙術から発展した伝統医術を取り入れつつ、現世的な不老長寿を目的とせず、さとりの手段に昇華させるべく各種の氣息治病法が修行者たちに実践されたのである。天台止観の形成もこうした動向の一つと位置づけることができよう。

キーワード：智顛、『禪門口訣』、氣息